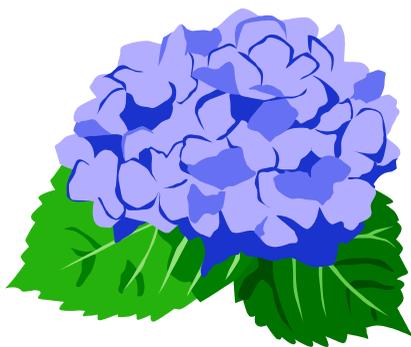


二
すくみには

蛞蝓
が
足
り
な
い



三すくみには蛞蝓が足りない

夏至 陽熱至極しました、日の長きのいたりなるを以てなり
小暑 大暑来れる前なればなり

目次

一 朝起きたらうちの神様がロボでした。

夏至・初候 鹿角落（鹿が角を落とす）

4

二 夏の蓮の葉商い

小暑・次候 蓮開始（蓮の花が開き始める）

24

「幻想郷は全てを受け入れるのよ。
それはそれは残酷な話ですわ」

——八雲紫（東方萃夢想）

一 朝起きたらうちの神様がロボでした。

守矢神社の朝は早い。

幻想郷に来て、以前のように時計の針に縛られた慌しい朝こそなくなりはしたが、それでも正しい信仰は正しい生活習慣からとばかり、東風谷早苗は朝早くに布団を出て二人の神様の朝餉の支度を始める。

変わったところといえば——二柱と一人、いや三人が揃って食卓を囲み、そしてそれからゆつくりと食後のお茶を愉しみながら、昨日あったこと、今日あることをあれこれと話すひとときができたことだろうか。「神奈子ーっ、朝ご飯だつてば。起きてるー?」

今日はいつになく寝坊しているもうひと柱の神様を叩き起こすため、洩矢諏訪子は神奈子の部屋の障子を威勢良く開いた。

殺風景な部屋の中、珍しく布団に包まって出てこない相方に多少の違和感は覚えつつも、諏訪子はその傍に歩み寄る。

「ほら神奈子、何時まで寝てるのさ。いい加減起きな

いと——」

掛け布団に手を掛けて引つpegがそうとしたところ
でふと違和感を覚え、諏訪子は首を傾げる。

……やけに、大きい。

もともと身長差があるのは承知の上だが、それにしてもこう、布団から手足がはみ出すほど、八坂神奈子は大きかった——否、巨きかっただろうか?

「えっと、神奈子?」

訝りながらそっと布団をまくり、諏訪子はそのまま絶句した。

お陽さまの匂いいっぱい敷布団の上、鎮座ましますのは重厚な神徳を感じさせる、偉大な赤い塗装の複合重結晶蛇鱗装甲板。ぎらりと鈍い輝きを放つ四連装の128ミリオンバシラキャノン砲。背中に燦然と輝くは、日輪を思わせる電磁反応注連縄。

——それはもう、どこからどう見ても、まったく言い訳もきかないほどに。

「ロボだ————っつ!」

山じゆうに響き渡ったミジャグジ様の驚愕の声に、何事かと駆け寄ってくる足音ひとつ。

「どうしたんですか諏訪子さまっ!!」

「さ、早苗え!」

「すがるように諏訪子が降り返る先で、早苗も言葉を失う。

そりやまあ、主神の布団でまるで涅槃仏のごとく威厳と慈愛に満ちたロボの御姿で横たわるこの威容を見て動揺するなというほうが無理というもの。

「なんですかこれっ!? ていうか神奈子さまっ!!」

「か、神奈子、だよねえ……? いや、常識的に考えて違ふと思うけど……」

それにしてはカラーリングといい、全体的なフォルムのデザインといい、共通点がありすぎる。

「……おーい、神奈子ー?」

「か、神奈子さま……?」

疑問符をくつつけたまま、恐る恐るの巨神合体オンバシラー(仮称)の名を呼ぶ二人。だが、眼前の鋼鉄のロボは鎮座したまま応答する気配を見せない。

「な、何があつたんでしようか……」

「そんなこと聞かれたって……」

顔を見合わせて遠巻きにオンバシラー(仮)を見守っていた二人の目の前で、いきなり機械音が響いたのはその時だった。

オン(略)の胸元、やたらに派手派手しくなった神鏡が飾られている部分が、かしゅん、と左右にスライドして開く。

「ひあ!?!」

反射的に抱き合つて、二人は射線から逃れるように部屋の隅にへたり込む。

「び、ビーム? ビームですかっ?! らめえビーム出ちやうのお!?!」

「おおお落ち着いて早苗っ、違ふ、なんか違ふっばいよ!?!」

展開した鏡の下、ロボの胸元の、一〇センチほどの細長い穴は、赤熱するでもなく青白いプラズマを散らせるでもなく、じじじ、と擦れるような低いうなりを上げて細かく振動するばかり。

しばしの時を経て、そこから白い紙テープが伸び始める。

『ロボ チガウ ロボ チガウ ロボ チガウ ロボ チガウ』

「ロボだこれ……っつ!?!」

畳の上に伸びる感熱性の紙テープにびつしりと印

字された否定のカタカナ文字に、二人は渾身の叫びでもう一度突っ込んだ。



「……はっ!? ハッ、こんなことしてる場合じゃないよ、なんとかしなきゃっ」

前代未聞の珍事を前にして、先に我に帰ったのは諏訪子のほうだった。すっくと立ち上がった彼女は張り詰めた表情で早苗に振り返り、

「早苗っ、ごめん借りるよっ」

「は、はい!？」

呆然となっている早苗のポケットから取り上げた装置を手にして、諏訪子は鮮やかなキータッチで操作を始める。

【鋼鉄の】朝起きたら嫁がロボでした。【伴侶】

1 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:09:37
安産10

「って諏訪子様! スレ立ててる場合じゃないでしょう!? てゆかそれ私の携帯ですっ!」

「いやだって他にどうしろってのさ!？」

「いえあの諏訪子さま落ち着いてるふりして実はものすっごく混乱してませんか!？」

「そ、そんなことは——」

3 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:11:44
kvsK

4 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:11:51
ksk

5 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:12:17
wkdK

6 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:12:23
ksk

7 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:12:47
博麗神女

「へい ksk 甲シ!？」

「うえあのやったの諏訪子ちゃんじゃすよ!？」

「いやだってほらとりええすやっとかないよ!？」

混乱の中、早苗の抗議をよそに、ちのびな Twitter

と勘違いしてる誰かを交えたりもしつつ、液晶の中ではあつというまにレスが進みスレが伸びてゆく。

普段はいるかいけないか分からなくとも、妖怪名無しさん達はこういう時だけは抜群の呼吸を見せるのだった。

息の合った連携は瞬く間に指定安価へと近づき、

9 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:13:04
Ksk

10 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:13:28
>>1 おつぱいうp

「来たー!? さ、早苗どうしよう、おっぱいうpだつて!?」

「ですから諏訪子さま、そんなのに答えてる場合じゃなくてですねっ!?」

「どうしよう、こんな神奈子脱がしてもしようがないし、早苗脱ぐ!?」

「いえですから諏訪子さまっつ!?」

「ああつ! でも幻想郷的にはいつそ私が脱いだほうが受けいいのかな? どう思う早苗?」

「……ッ!」

突っ込みつつも相当テンパっているのはこちらも同じか、早苗は諏訪子の手から携帯をぶん取ると青空めがけて力いっぱい放り投げた。後で苦勞するのは自分なのだがそのあたりはすっかり頭から吹き飛んでいる。

ついでにその勢いを利用して御幣(いわゆるひとつの風祝)が持つてるアレ)でスパーンと諏訪子の後頭部を一撃。

「落ちていくくださーいっ!」

「あうっ!」

すっ転ぶケロちゃんと同時に、帽子の目玉ふたつも律儀に一緒になって△△のような表情を作っていた。このへんの芸の細かき、神様マジ半端ない。

突如の風祝の暴拳に、涙目になって身体を起こし、ずれた帽子を直す諏訪子。

「突っ込んだ!? か、神様に突っ込んだよ今!? しかもかなりきつ方法で!?」

「落ち着いてください諏訪子様、そんなことしてる場合じゃないと思いますっ!」

「でもほら早苗、どうせこれ文字だけなんだからちよこつとそう書いときゃ實際脱がなくなつて分らないってば。どうせこのあたり予告編にも載ると思うか

らそれっぽいサービスシーンをね!!」

このあたりはさすがが神様、幻想郷にあつても信仰の得かたはよおく心得てらっしゃる模様。

「ですからそういう危険な発言は控えてくださいってば!!」

もう一発要りますか、と御幣を振り上げる早苗の目が大分据わつてゐることを把握したか、諏訪子もとりあえず手を上げてそれを制した。

「いや、うん、わかった、ごめん早苗、ちよつと待つて落ち着くから」

「は、はい」

すう、はあ。すう、はあ。

四、五回ほど深呼吸をして、諏訪子はゆつくりと目を開く。

「……うん。ちよつと取り乱してたみたいだ。悪かったね早苗。心配かけて」

ちよつとで済む問題かなと早苗は思ったが、あえて突つ込まずに流すことにした。幻想郷だつて時には常識に囚われていたほうがいいこともある。

ひとまず落ち着いたところで、諏訪子はちらりと背後に横たわる相手の様子を窺つて、小さく吐息。

「ええと……とりあえず、夢でもないし冗談でもなさ

そうだね」

「みたい、ですわね……」

「うう、なんでこんな愉快な……じゃない、とんでもないことになつちやつたのさ、神奈子。そりゃ確かにあつちこつちでガンキャンオンなんだつて言われてたけどさあ」

「……確かに巨大ロボは期待してましたけど、さすがにこのデザインは……無いですよええ」

声を潜めながら、鋼鉄の巨軀を見上げる二人。

「神奈子、まだ起動してな……こほん。眠つてるのかな? これつて」

「ええ、気付いてないみたいですけど……」

「それにしても文字だけでホント良かった……挿絵とかあつたら著作権やばいよねこれ」

「ええと、著作権は置いておくとしても、この状況で神奈子さまが気付いたら……その、多分」

「大騒ぎだろうなあ……」

先日の某所人気投票の結果発表以来、神奈子が落ち込んでゐるのは二人ともよおく知つてゐる。本人は努めて気にしてゐないとはかり、普段どおりに振舞おうとしてゐるのだが、それがますます二人にはいたたまれないのである。

「それだけじゃない、天狗あたりに知られて新聞のネタなんかにされようもんなら、それこそ神奈子、立ち直れなくなっちゃうよ」

「そうですね……」

注意深く付近の様子を窺う早苗。いまのところその心配はないようだが、早耳早目神出鬼没で知られる幻想郷最速ブン屋のこと、こんなにも珍妙かつ絶好のネタをいつまで放置しておくだろうか。

「うかうかしてらんないね。神奈子が目を覚ます前に手を打たなきゃ」

「はい……!」

諏訪子に答え、早苗も硬い決意とともにこぶしをぎゅつと握る。

そう、彼女とて不安だった。この状態の神奈子が果たして神様として正気を保っているかどうか、考えれば考えるほど果てしなく疑問だ。

いくらロボとはいえ、今後ずうつと目とかピカピカ光らせながらカタコトのロボ語とかで話しかけられたら一生モノのトラウマ（笑撃的な意味で）かもしれない。

……というか現状、まともに神奈子の姿を見て話すのも結構辛い。

「っ……」

噴き出しそうになるのをなんとか堪えながら俯く早苗の肩に、そつと小さな、けれど暖かい手のひらが乗せられる。

こちらもしさりげなく神奈子のほうから視線をそらしつつ、諏訪子は早苗にやさしく告げる。

「うん。ややこしく考えるからいけないんだ。これは異変だよ早苗。原因究明、その解決。それは、幻想郷の巫女の仕事だろう?」

「……はい!」

信仰と、祈りと、なによりも平穩無事な日常のため。ふたりは強く誓い合うのだった。



神奈子の寢室の障子をしっかりと閉め、外から見えないようにして、隣の部屋で様子を窺ながら二人は今後の状況を話し合うことにした。

流石に目の前で騒いでいるといつ神奈子が起き出すとも限らない。かといつて目を離すのもなにやら不

穩に思えたため、ひとまずの折衷案である。

「まずはこうなった原因を考えようか。昨日まではごく普通の神奈子だったよね。なら、夜のうちに何かがあつたんだよ」

「私が最後にお会いしたのは、お風呂の後にご挨拶をしたときなんですけど。諏訪子様は？」

「んー、昨日は早く寝ちゃつてたからなあ」

基本的には9時就寝の諏訪子様である。これは信仰を効率よく使うために健康的な生活を心がけているのであつて、断じて外見相応に小学生レベルつてわけではない。ないつたらない。

「夕飯の時は早苗も一緒にいたしねえ。早苗が最後に見たとき神奈子、様子おかしかったりした？」

「いえ……まだ起きてらしたので、お風呂を勧めて……特に変わったところはなかったと思います。ちよつとオンバシラキャノン砲の照準調整のお手伝いをしたくらいですね。『ガガ、サナエ モ ハヤク ネナ サイネ』とか言つてましたっけ」

「いや早苗それ思いっきりロボだよ!! そこでもう既に9割は確実にロボだよ!! なにさ照準調整つて!?!」

「ああつそう言えば確かに!?! あんまりにも馴染ん

でてぜんぜん気付きませんでしたっ!?!」

ナチュラルに言つて驚く早苗に、ああこの子本当にこのままこの神社の風祝にしといていいのかなあとやや不安になる諏訪子。

「早苗も気付こうよ……まつたく。でもそうすると、夜じゃなくてももっと前からこうなつちゃう予兆はあつたつてことか。でもなあ、昨日の夕飯の時にはそんなに変でもなかつた気がするんだけど……私も晩酌付き合つたし」

「そうですよね、確か神奈子さま、とつておきのハイオクがあるからつて一人で一斗缶まるまる空けちゃつて……」

「そうそう、あんなのどこに隠してたんだかね。なんか最近じゃ原油価格高騰だからで滅多に飲めないつてばやいてて……」

……………。

「ロボだ……つ!?!」

またもその単語にセンサーが反応したか、隣の部屋ではロボ神奈子の口からは『ロボ チガウ ロボ チ

『ガウ』の紙テープが吹き出しはじめる。テープの束こ
んもりと積み重なって、そろそろ布団が見えなくなり
つつあった。

そんな悲惨な状況にはまるで気を回す余裕もなく、
ふたりは頭を抱えるばかり。

「ロボだよ早苗!? 神奈子ですでもうロボだよそれ
!? なにさハイオクって、思いつきりガソリン飲ん
でるじゃない!? てゆか食事代わりに油飲むロボつ
てどんだけレトロなのさこのご時世!? やばいよ幻
想郷マジ半端ないよ!」

「な、なんで気付かないんですか諏訪子さまもっ!?
長いお付き合いなんですよ!?」ご自分だけ普通に
お酒飲んで違和感とかなかったんですか!」

「仕方ないじゃないさ気付かなかったんだから!」
ケロちゃんちよっと逆切れ。

「あ、あの、諏訪子さま、とつても怖いことを思いつ
いてしまったんですけど」

「あーうー、いい、やめて早苗。言わないで。なんと
なく分かっているから。すごく怖い。マジで怖いからや
めてお願い!」

まさか、神代の頃から神奈子がずっとロボだったこ
とに気付かなかった……などということになったり

すると。

最悪の想像に神格崩壊の危機を覚えつつ、諏訪子は
こつそりとその問いかけに蓋をする。

棚上げ。というより神棚上げである。

……ともあれ、幻想郷に来て以来の記憶に残る神奈
子との日々が、思い返してみればロボだらけであるこ
とに早苗と諏訪子は愕然としていた。

目を点滅させながらカタコトのカタカナ合成音声
で喋り、感熱性の紙テープで信託を下す威厳たっぷりの
巨神合体オンバシラー。その荘厳な姿に畏敬の念を
抱き、ひれ伏す人々。

その事実を改めて認識してしまい、諏訪子は気が遠
くなるのを感じながらふらふらと柱に寄りかかる。

「な、なにさこのロボのある日常ッぷり……まるつき
り違和感なく馴染んでたよ……!」

「全然気付きませんでした……!」

さしもの神様も風祝も、守矢神社の主神がロボであ
ることにまったく気付かず接してきた日々を突き
つけられて完全にグロッキー状態。

「うう、これは……いや、でも……!」

否定したくとも、脳裏に鮮明に焼き付いた鋼の手足
巨大なオンバシラキヤノン砲。これまで傍らにあった

もう一柱の神の、記憶の中のあり得ない外見にいろいろと衝撃の事実を受け容れられず、諏訪子はぶるぶると頭を振るばかり。

そんな諏訪子の背中で、うあ、と小さなうめき声。

「え、ええと……諏訪子さま」

「ど、どうしたの、早苗!?!」

なにごとかと振り返る先で、ノートを広げて俯く早苗の姿がある。おそろおそろ覗き込んでみれば、それは神社の出納を記した家計簿兼用の帳面だった。幻想郷に来る時に新調したもので、もう半分以上のページが埋まっている。

その出費欄に記された項目が、残酷なまでに真実をつまびらかにしていた。

おおよそここ半年近くの間、当然のごとくに食費に加算されている、神奈子の燃料費（レギュラー）。

「……………」

「……………」

「……………」その、やっぱり内燃機関だったんですね、神奈子さま」

「……………」課題は、環境問題かな」

「そうですね。光子力とは言いませんから、せめてハイブリッドくらいには……………」

もはやふたりとも魂が抜けきっての脊椎反射。何を話してるのかも良くわかっていない。

「あ、去年の冬にスタッドレスオンバシラに交換されてます」

「……………」えつととき、……………」ああ、いいやもう」

もはや諏訪子には突っ込む気力すら残っていないかった。

「うー、あ……………」もう!?! なんて、どーして気付かないかなこれ!?! 半年前からふつーにガソリン飲んでいるじゃん神奈子のやつ!?! といつかいつからうちの相方は車になったんだっ!?!」

ケロちゃんはバンバンとちやぶ台を叩いてエキサイトする。自分への不甲斐なさを含め、昂ぶった感情は鎮まらない。

「普通神様に要るのってガソリンじゃないっしょ!?! 信仰でしょ!?! それなのにもう、あーもうっ!?!」

「……………」あの、それなんですけど諏訪子さま」

「なに? もう大概の事じゃ驚かないよ?」

「ええと、その、これを……………」

隣の部屋、いまだ横たわったままの神奈子の腰の裏あたりに屈みこんで、早苗が心底嫌そうな表情で指差しつつ、悲痛なうめきを漏らす。

ひたすらに嫌な予感しかしないのを堪えながら、諏訪子は早苗の隣に歩み寄り、

【信仰】 満——中——空

……どうみても燃料メーターです。本当にありがとうございます。うございました。

「石油ストーブじゃ、ないんだからさ……」

熱い涙があとからあとから溢れて、前が見えない。

「あ、最大容量16リットル信仰って書いてあります……」

「うん、燃費は、いいね……」

自分の信仰する神様がバイク並みの燃料タンクしか持つてないところにとどこまで突っ込むべきかと思いつつも、早苗はそつとその上に毛布を掛けなおした。というかもはや直視するのは辛い。

「ああそっか、忘れかけられてたんだもんなあ……そりゃ燃費もよくなきゃやつてらんないよねえ、うふふ……」

「す、諏訪子さましつかりしてくださいっ!?」

諏訪子はすでに瞳からハイライトを失くして遠くを見つめだしていた。いまにも『中に誰もいませんよ?』とか言い出しそうな諏訪子に、早苗は慌てて飛びついてその肩を揺さぶる。

そろそろ本当に神格崩壊の危機らしい。

「あー、仕方ない。これだけはやりたくなかったんだけど……最後の手段だ」

「す、諏訪子様……?」

「ごめんね早苗、最初に謝っておく。……軽蔑してくれました。いいよ。でも、……他に方法がないの。だから——許して、とは言わない」

「あ、あの、いったい——」

「あのね……」

真剣な顔をして、諏訪子は唇を開く。



「ということ、洗いざらいぶっちゃけに来ました」

「お願いです助けてください霊夢さんっ」

「帰れ」

所変わって博麗神社の境内。涙を流しつつ深々と頭を下げる二人に、心底呆れながら霊夢は答えた。

「それで相談に来たってことか？ いやあ難儀だな」
うぶぶ、と笑いを堪えながらの白黒魔法使い。ほうっておけば今にも箒を引つつかんですつ飛んでいきそうな気配なので、こちらにも諏訪子がしつかりとにらみを利かせている。

「……つくづく愉快な神様ね、あんたのことは」

霊夢は境内を掃いている手を止め、立てた竹箒の柄に手を重ねて顎を乗せ、呆れたように溜息をつく。いや、事実呆れているのかもしれないが。

「いろいろやってみたんですけど、どうしても元に戻らなくて……」

「その色々の内容に山ほど言いたいことはあるけど」
守矢神社でのおおよそ2時間ほどの迷走を続けて後、ようやく諏訪子と早苗はここに至っている。

博麗の巫女はどうもそのあたりに突っ込みたいらしいが、いまさら過ぎ去った時は帰らないのであった。「何にせよ、理由は単純なことじゃない」

「わ、分かるんですかっ!?!」
知っているのか霊夢、とばかりやたら濃ゆい顔で詰め寄る早苗に、霊夢は暑っ苦しいなあもうと距離をと

りつつ、指を立てる。

「簡単なことよ。外の世界と、幻想郷での神様のあり方の違いね。まあ、私には外の世界のことは良くわからないけど」

「神様のあり方が違うって……た、確かに博麗神社にはかたちのある神様がいらっしやいませんけど……まさか、幻想郷だと神様は消えてしまうんですかっ？ それとも神社が貧乏になると神様も消えちゃうとか！ そんな、それじゃあ何のために——」

「ええい、だからひつつくな落ち着け！ あと貧乏巫女言うな」

青ざめてすがり付こうとしてくる早苗を、霊夢は鬱陶しげに払いのける。つんのめった早苗を慌てて支える諏訪子。

「そうじゃないってのに。私が言いたいのは、あつちとここじゃ事情が違うってことよ。あんたもよく言ってるじゃない、信仰よ、信仰」

「しんこう……?」

「ああもう、早苗、女の子がそんな顔しない」
涙でぐしゃぐしゃの早苗の顔を、諏訪子が袖でぬぐってやる。

なお、幻想郷で神様が消えてしまうなどということ

は断じてありえないのは、あちこちに存在する厄神様や秋の神様姉妹などをみれば明らかなのだが。

「そもそもあなたたちが幻想郷にやってきたのは、外の世界で忘れられかけた神様への信仰を得るためだったのよね？」

「はい……」

「信仰ってものは、ごくごく大雑把に言えば信じる対象、神様に対する人々の思いのカタチよ。ここに限らず神様は信仰のされ方でその形が変わるものなの。」

ただの妖怪や災害も時には神様として奉られたり、もともとあった神様が他の神様と結び付けられてあたらしい側面をもつたり、別のご利益を持つ別の神様として奉られることもあるわ。……ほら、大黒様なんかいい例じゃない？」

七福神で有名な福の神様だが、あのふくふくと太って丸々しい温厚そうな神様、元を辿っていけばヒンドウの破壊神の一面。滅法強くて好戦的で、相手の血肉まで喰らっちゃう闘いの神様である。

「まあ、そんなのは人が神になるとか言ってたあんたも知ってるでしょうけど。要するに、今回のその口ボ？ 騒ぎの原因もそれよ」

よく飲み込めていないのかきよんとしている早

苗の目の前に、霊夢は溜息とともに立てた指をびりりと突きつける。

「つまり、あんたのこの神様が幻想郷にやってきて、こつちで得た信仰つてのがそういうものだったってことよ！」

「な、なん（ry）」

誌面を見開きで埋めんばかりの勢いで驚く二人。
（※なお文字にすると行の無駄が半端ないので都合によりスキマ送りにされました。）

「そ、そんな……まさかっ」

「おお霊夢。なんかそうしてると巫女みたいだぜ」

「巫女なのよ、真正銘」

からからと笑う魔理沙を軽く睨み、霊夢はいまだシヨックから立ち直れずにいる早苗と諏訪子に呆れつつ軽く後ろ頭を搔いた。

まさか神様とか風祝が揃ってそこに気付かないとは思っていなかったのだが。

「成程な、神奈子がそんな愉快なことになってるのはその新しい信仰のせいってことか」

「聞いている限り、これまで二人の神徳を保ってたのは

大半が早苗の信仰だったんでしょ？ あっち側でも完全に忘れ去られて立って訳じゃないんだろうけど、それにしたって早苗の仕えてた神社を通じての信仰なわけよ。『ここにはこんな神様がいます』ってことをしっかり伝えた上での信仰が、共通認識としてあったわけ」

ふう、と吐息を挟み、霊夢はふたりの顔を見回す。「縁起に由来、神社の信仰は歴史に深く根付いているから一朝一夕で決まるものじゃないし、そんなに急激に変化するものでもないわ。でも、こっちに來るにあたってその辺の多くをあなたたちは向こうに置いてきたって話じゃない」

八坂神奈子、洩矢諏訪子。その二柱がもともと何の神様であったのか——それは、この幻想郷においてはあえて知ろうとしなければ知りえないものだ。

「だから、外の世界にあつた信仰と、幻想郷に來て得た信仰が同じものじゃなかったってことね。ましてあなたたちの場合、信仰の結構な割合が山の妖怪なわけだし。……人間と妖怪じゃ神様の受け止め方も違ふのよ。まあ神様に限ったことじゃないんだけど」

「そ、そんな!! 神奈子はこっちじゃロボの神様ってこと!? いやそれはそれでお似合いつて言うか笑

えるけど、なにがどうなつたらそうなるのさ!」

さりげなく本音を漏らしつつ、諏訪子は崩れ落ちる早苗を抱きかかえながら声を上げた。

「どうって、自業自得でしょそんなの。あんたたちがこっち來てやったのって、博麗神社の地上げと核兵器の不法投棄。UFOの捕獲に巨大ロボの搜索。もうどこにも神様っぽさないじゃない」

「あー、そりゃ河童あたりはそこら辺の神様だと思っわな」

「で、天狗がどう思ってるかはこのへん読めば一目瞭然じゃない?」

取り出された某新聞の山が、なんとというか圧倒的な説得力を示していた。

もともとが風の神様と言っても、ソレらしいことをしていなければ当然、核融合でエネルギーと産業革命をもたらす神様か、新しい領土を占領する神様として認識される。

それぞれの乾と坤を操る程度の能力というのも、多く一般にはふたりの神様の個性に消されてしまっているのが現状だろう。

「その結果がそのロボ? なわけよ」

「いやあ——っ!」

頭を抱えてうずくまる早苗が、最後の悲鳴を上げた。ふるふるかぶりを振って、涙目になり、縮こまって動かなくなる。

「技術革新の意味で河童の、山岳信仰ってことで天狗の信仰も得たんだらうけど……ねえ、早苗？ 知ってるかしら。妖怪はね、本来神様なんて要らないのよ。今の信仰もどっちかと言えば興味本位。本来の信仰とはちよつと質が違うわ。」

第一ね？ もし、もし妖怪がきちんと神様信仰するなら、私がこんなに苦労してるはずないじゃないッ……！

「おお、貧乏巫女が血の涙を流してるぜ」
文字通りの血を吐くような叫びが、空しく境内にこだまする。

「あっはは、苦労するよねえ霊夢ー」

「だからあんたのことだつてのにつ！」

いつの間にか聞いていたらしい、赤ら顔の葎香に怒鳴り返す霊夢。が、当の鬼はどこ吹く風と、縁側で寝そべりつつ瓢箪を掲げてけらけらと笑っていた。

「その一端が自覚がないからもうね、もうっ……！
妖怪の居ついてる妖怪退治の神社ってなによその説得力のなさは……ッ！」

「妖怪じゃないって鬼だつてー」

「世間様じゃだいたい一緒扱いなのよっ！」

ばん、と大きく足をふみならして叫ぶ霊夢。

しばしののち博麗の巫女は、すう、はあ、と深呼吸をして気分を落ち着ける。

「ともかく。理由はそういうことよ」

「そんな……」

「このまま放置しとくともつと影響出るかもね」

霊夢の指摘に呆然となりながら、早苗はふと、『そういえば、最近河童がこの前のUFOを非想天則に組み込んで空を飛ばせようとしてるらしいですねっ♪』という数日前の夕ご飯の話題を思い出していた。

『ああっ!? 諏訪子様がいかにも2号って感じの重心低めかつ水中仕様なサポートメカに!?』

『じ、神社が発射台兼秘密基地にッ!?』

『博麗神社が悪の結社の大幹部の基地にッ!?』

『霊夢さんが悪の女幹部にッ!? でも胸が寂しいせいでボンテージ巫女服が全然似合っていない!?』

『サナエ トモニ ユコウ タタカオウ サア コクピット ニ』

『それゆけ、いまこそ合体だオンバシラー!!』

「そ、そんなのは嫌っ、断じて願ひ下げですっ! こんなデザインセンスの欠片もない巨大ロボなんて、非想天則のほうがかかなりマシですよっ!!」

「いやさらっとお前」

「……あとさ。なんかいまあんたものすっごい失礼なこと考えてなかった?」

ジト目になる二人だが、早苗と諏訪子には残念なことに届いていなかったらしい。

「地底の連中だって、そりやそれなりに感謝はしてるだろうけどね。サトリが神様信じてるかって言うと微妙だし、カラスやら猫やらがどれだけ神様を理解してるかって言うと怪しいね。」

ま、そもそも長年地底に引つ込んでるあいっつらに正しく外の神様を理解しろってほうが無理じゃないかなあ」

縁側で横になったまま萃香が補足する。

そもそも鬼が神様を説く時点でどうかと聞いたい霊夢だったが、これ以上言っても苦しいのは自分だけなので黙る。

「こんなの困ります! ど、どうすれば治るんでしょうか……」

「そりゃあ、正しく理解してもらおうのが一番の近道じゃない? あんたのところの神様が、どういう神様で何のために祀られているのか。それを伝えてあげればいいのよ。そういうの説明もせずに、単にご利益があるとか、すっごい神様だとか、それだけじゃ伝わらないこととはあると思うわね」

「……………」

霊夢の一言に、風祝は静かに両腕を垂らした。

「わたしは、間違ってたんでしょうか……」

「早苗……?」

うつむいたまま、ぽつりと言う早苗を、諏訪子が心配そうに見上げる。

「少しでもおふたりのお役に立ちたくて、幻想郷の信仰を集めようとして……でも私、神奈子様も諏訪子様のことも、なんにも知らなかった……おふたりの一番そばにいたはずの、私が……っ」

目元を擦りながら、早苗は小さく声を詰まらせる。

「確かに、最近神奈子様の扱いってぶつちやけ私のオプシオン担当っていうか、そもそも私自身が人にして神でもある現人神で、これはもう言ってみればほぼ神

様なわけですから、だったらもう自機化もロクにしてもらえなそうな人気のない神様は後回しにしても、私に人気さえあればそれでもうだいたい神社の信仰とあって十分じゃないかなー、みたいに考えてたのは事実ですけど……」

「……あんたつてたまに天井知らずに思いあがるわよね」

「はやくここの流儀に慣れようとして、挨拶のために新しくスペルカードも作ったのに……」

「いやアレはどうかと思うけど正直」

「霊撃一発だしな」

「うわあーんっ!?!」

「さ、早苗おちついてっ!?! 大丈夫、だいじょうぶだつてば!?! ああ泣かないでーっ!?! つていうかその巫女と白黒余計なこと言わないよおー!?!」

慰めるのと文句言うので大忙しの諏訪子。

「うう、ぐすつ……あ、あの、諏訪子様、ダメですか？ 五穀豊穡ライスシャワーとか……名前、イケてますよね？」

「いやその、それは、……」

「正直にお願いしますっ、す、諏訪子さまにまでそんな顔されたら、わたしもう本当に……馬鹿みたいじゃ

ないですかあっ」

「……ぶっちゃけネーミングセンス的には全世界ナイトメアあたりのレベルかなーと」

「うわあーんっ!?!」

「あああごめん早苗っ!?! でもほら正直に言えつていうからっ!?!」

今頃どこかでカリスマ高ストップ安の吸血鬼お嬢様もメイド長の胸で泣いていることだろう。

「あーあ、泣かしたー」

「大人げないぜ、神様のくせに」

「あんたらねええっ!?!」

「……諏訪子さま……」

「ええと、大丈夫？ 早苗……?」

「……ぐすつ」

諏訪子の腕の中で、早苗は涙をこぼしながら、歯を噛み締める。

もともと、はじめからわかっていたことなのだ。

幻想郷へと旅立つ決断をした時点で、外の世界とのつながりは断たれることは明らかだった。そこには八坂神奈子、洩矢諏訪子を知る者は風祝たる己以外にはおらず、なればふたりが神としてのそのあり方を変えることは避け得ないことだったのだ。

それが二柱と共にいる、自分の役であるというなら。それは、守矢神社の風祝、楽園のもう一人の巫女、東風谷早苗の矜持なのだ。

「つ、私、もつと頑張りますっ……私がおふたりのお力をしつかり受け継いで、理解して、感じて、そのあり方を広めなきゃいけないかったです。いまみたいない間違ったかたちじゃなくて、ほんとうの、ちゃんとした姿で！」

たとえ拙くとも。共に、〃傍にいますかみさま〃を知る自分が。それを果たさねばならない。

「私は、世界中の誰にも負けないように、お二人を想いますから！」

「早苗……」

感極まったように飛びつく諏訪子を受け止めて、早苗はその小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「ですから、教えてください。おふたりに昔、何があつたのか。どうして、ウチの神社にはふたりの神様がいるのか……！」

「……ん、そうだね」

——ああ、多分。

このために、私たちはこの幻想郷にやってきたのだ。言葉にはできぬおもいをそつと噛み締めて、諏訪子

はそつと早苗の胸に顔をうずめる。
（なあ霊夢、早苗のやつ今さりげなく河童とかの信仰全否定したよな？）

（……まあ、いいんじゃない？ 本人たちの間でだけはいいい話っぽくまとまりそうだし）

なお、すつかり蚊帳の外のふたりはきちんと空気を讀んだ。



後日——

早苗の尽力と諏訪子の奔走により、ほどなくして神奈子の姿は元に戻り、本人はまったく気付かないままにこの騒動——否、異変は終結する。

早苗は早速、八坂神奈子、洩矢諏訪子の二柱の神様の由来を示すための活動を始め、神社の境内には拙いながら、風祝直筆の縁起が記された。なお、この時ほど早苗は自分が習字を真面目に習っていなかったことを後悔したことはなかったという。

だが、徐々にではあるが二柱——あるいはふたりへ

の理解も進み、信仰も広まりだしている。
実に平穏な日々が——ゆつくりと流れ、春が過ぎ、
夏が訪れようとしていた。

——かに、見えたのだが。

「お早うございます、神奈子さま、諏訪子さま！」

「お早うって、もう夕方——ぶはあ!？」

ロボの呪縛から解放され（といっても本人に自覚はないのだが）神の威厳たつぷりに杯に口をつけていた神奈子は、そのまま思いつきお神酒吹いた。

顔をびしょ濡れにされた向かいの諏訪子があうあうと呻くのも放置し、げほげほと咽ながら目を丸くする。

「さ、早苗ちよつと待って、何、なにその格好は!？」

「はい?！」

小首を傾げ、早苗はそのばでくるうりと一回転。

白い袖以外に何も身につけない、ごくごくシンブルな姿。現代っ子の発育のよき補正で麓の巫女よりはわずかに勝っているけれど、全体的に見ればいろいろ控えめな胸とか、ほんのりと色づいたその先端とか、やや硬めな鎖骨とか綺麗なカタチのおへソとか、白くて

柔らかそうな太腿とか、それ以上に女の子としてちよつとくらいは恥じらいを持ってても罰の当たらない場所までもがもういろいろ遠慮会釈なくむき出しで。挙句ああもう見せられないよ!

「どうかしましたか?！」

「ど、どうって!！」

思わず目を逸らしながら叫ぶ神奈子。

諏訪子もとりあえず目を覆っているが、さりげなく指の隙間から念入りに早苗を観察中であつた。ご先祖として思うトコロはいろいろあるようだ。

もっともそれが『まるで成長していない……』なのか『大きくなつたねえ……』なのかはいろいろ議論がありそうだが。

「ま、まさか……!！」

そうなのだ。予想してしかるべきことだつたのだ。幻想郷に限らず、信仰によつて神様のあり方が変わるなら、当然ながら現人神だって同じなのである。

訪れた異邦で、常識に囚われないことが大事、と常々口にしてきた早苗が——ひとつの信仰として、人々の思いを集めているのもまた同じ。多くの人はその言葉を聴いて、なぜかそう思ったのだ。

これぞ”常識に囚われない”早苗さんと。

さすがに人の身で、その姿かたちこそ極端に変わることはなかったのだが——

「じゃあ、ちよつと里にいつてきます」

「いや待て待つてちよつと待つて早苗!?!」

「お茶請けは戸棚にありますから」

「うわあ待つてだめ早苗飛んじやだめ飛んじやうのらめえー!! ぜ、全部丸見えだから!?!」

……五分後。博麗神社。

ふたりの神様と、なぜか素っ裸の風祝を前に、霊夢は顔を覆つて吐息をひとつ。隣で魔理沙がお茶を啜る。萃香は腹を抱えて爆笑中。

「……なあ、要するにお前らの言つてる信仰つてのはお約束のことか?」

「多く集まる人の心が、特定の結果を期待するわけだから、間違つてるわけじゃないと思うけど」

人口に膾炙する噂は、真実となる。事実そうやって生まれた妖怪というものもいるわけ。

幻想郷の懐の深さは半端ないのである。

「聞いてください、昨日、夢の中でお告げがあったんですっ! それで朝起きたら次作ではどうとう霊夢さんに代わつての単独自機でした! 神奈子様と諏訪子様の言うとおりですっ!」

「ほ、ほら落ち着いて、ね? 早苗つてばちよつと、錯乱してるだけだろう? ほら、深呼吸っ」

「お願いだよ早苗、正気に戻つて! 謝るからつ、スペカ名とか馬鹿にしちやつてごめんつてばーっ!」

「そんなことありません、確かに見たんです! わたしは皆さんとは違ふんですっ!」

「早苗ーっ!」

袖だけで空を飛び力説する風祝が、広く幻想郷の名物となるのは、翌日のことであつた。

……なあ、のちに正気に戻つた早苗は一月ばかり引き籠つたという。

— 三すくみには蛞蝓が足りない —



二 夏の蓮の葉商い

一昨日までの豪雨から一転し、梅雨の気配はどこへやら、空は晴れやかに一足早い夏の空。

このまま日が続けば、数日もせずには夏の早い蝉でも鳴き出しそうな天気だった。いっそもまたどこぞの天人がなにかを企んでいるのではと疑いたくなるほど。

神社裏手の縁側には、いつもの面々と、あまりここで揃っては見かけない顔が集い、思い思いに早い夏の陽射しを楽しんでいる。

「おお、いいねえこれ、なかなか素敵じゃないか」

「うちんここには池なんてないからねえ」

一面に蓮の葉を茂らせた神社裏手の池で佇むのは、山の上の神社の神様ふたり。特に諏訪子の方はいまにも飛び込んでいきそうな気配で、さらさらと水音を立てる澄んだ水面を覗き込んでいる。

「霊夢も普段は忘れてるぜ。多分、都合のいいときだけ思い出すんだ」

「失礼ね、手入れくらいしてるわよ」

「ええー、頑張ってんの主に私じゃないかー」

答えたそばから舌足らずな抗議の声。木陰に寝そべって瓢箪をあおり、赤ら顔のまま萃香が口を尖らせていた。

今日も今日とて酔っ払っているが、いくら美味しくともあんなに毎日おんなじものを飲んでいて飽きないものかとたまに思う。

「ふつう、蓮があるのはお釈迦様に西方浄土だろう？ なんか謂れでもあるのかい？ こと」

「昔からあるだけよ。どこから湧いているのか知らないけど」

池から溢れた水は、裏手の沢に流れている。おかげで夏場は蚊が鬱陶しいが、それでもひと時の涼を取るのにはありがたい。寝苦しい夜にはそれなりに重宝しているのだ。

「なあ霊夢、それはそれとして腹が減ったぜ？ いつになったら宴会始まるんだ？」

「知らないわよ。宴会だなんて言った覚えもないし」 今日、山の上から神様まで総出で出張ってきているのは、先日の異変解決のお礼という名目だった。

あの妙な騒動の何がどうなってオチがついたのかはさっぱりだが、どこからか聞きつけた魔理沙はちゃ

つかりここに同席している。

「そもそもあんたぜんぜん関係ないじゃないの」

「いや、霊夢もほとんどなんもしてなかったと思うが」

そもそもアレを異変と呼んでいいのかどうかは議論の余地があるだろうが、ここはさて置く。

「大体ねえ、たまにはたかるばつかりじゃなくて自分でも用意したらどうなの？」

「応、それじゃあ遠慮なく」

「んで、うちの戸棚を勝手に漁るのは用意って言わないのよ」

これ幸いと台所へ向かおうとする魔理沙の襟首を掴んで制する。ぐえ!! などと少女らしからぬ呻き音が聞こえたが、自業自得というものだろう。

「れ、霊夢なにすんだ殺す気かっ!!」

「いいから黙って座ってなさい」

「あっはは。魔理沙は懲りないなあ」

ぐくぐくと瓢箪をあおつて濡れた口元をぬぐい、萃香が笑う。それを目ざとく見つけ、魔理沙はそちらを振り向いた。

「……む。じゃあ酒でもいいか。一口もらうぜ?」

「うあ!? ちよ、こら離せ、駄目だつてのにっ」

「いいだろ、減るもんじゃないだろうに」

「減らないけど減るんだいっ」

今度は瓢箪をめぐつて言い争いを始めるふたり。なんとも実にかまましいものだ。

取り合う気をなくしてお茶を啜っていると、もみ合う二人を引きはがすようにして、諏訪子が割つて入った。

「あーあー、待ちなよ二人とも? 確かに、こんだけ揃つてなんにもなしじゃ詰まらないし、間も持たないよねえ。——ねえ霊夢」

「なによ?」

こちらを見た諏訪子は、ちよいちよいと池から伸びる蓮の葉を指さして言う。

「これ、少し貰つてもいいかな」

「いいけど。あとでお賽銭弾みなさいよね」

「あーうー、こつちの巫女はなんとという蓮葉商いか。もうちよつと神に畏敬を持ってもバチは当たらないと思うけどなあ」

などと苦笑しつつ、諏訪子は蓮葉を茎から摘むと、とてとてと木陰のほうへと戻り萃香の傍にちよこんと胡坐をかいて座った。

そのまま、杯のようにささげ持った蓮の葉を示し、

「ほれ鬼つ子。こいつならどうだい？」

「……ああ、碧筒杯（へきとうはい）か。——通だね、神様」

「ふふん。伊達に長くは生きてないよ？」

きよとんとする魔理沙をよそに、萃香もすぐに意図を察したようで、腰の瓢箪を取り出して傾けた。諏訪子は大きな蓮の葉でその酒を受け、葉の茎を折ってその端をくわえる。

蓮の葉は雨を弾くように、注がれた透き通る酒精を丸い珠にして転がす。その様はまるで瑠璃か玻璃か。そうやって碧の杯に満ちた酒を、諏訪子はくわえた茎でゆっくりと吸い上げていった。

小さなのをこくりと鳴らし、酒気に満足そうに頬を染めて、諏訪子にはまりと笑顔を浮かべた。

「どうかね鬼つ子。その博識に一献」

「お。神様にここまで誘われちゃ断れないなあ。霊夢、わたしも貰うよ——」

萃香も慣れた手つきで蓮の葉を掲げた手元に萃め、諏訪子に做った。

大きな碧の杯をかたどる蓮の葉に、まるで宝石のようなところと転がる酒雫。きらきらと輝く雫をちゅう、と吸い上げ、飲み干して。二人は満足げに息を吐いた。

『酉陽雜俎』卷之七、酒食篇に曰く、〃之名を碧筒杯と為す。酒の味蓮氣（まじ）に雜り、香りは氷に勝りて冷たし。〃——」

「流石、酒に関しちや専門家だねえ」

「知らなきゃ鬼の名折れつてもんさ。ほら、もう一杯いきなよ神様」

からからと笑う萃香に、諏訪子も応じる。

鬼と神は、差し向かいに再度酒を注ぎ合って、杯に見立てた蓮の葉を触れ合わせた。こんどは互いの杯に注がれた酒を仲良く茎で吸い合う。

これが碧筒酒、あるいは碧筒杯と呼ばれるのは、夏バテ防止の作用のある蓮の茎を筒にして酒を啜るからだという。また、その飲み方の様子から、象の水浴びに見立てて象鼻酒などと少々風情に欠ける呼び方もされるとか。

「へえ……荷葉（かよう）に暑氣払いの薬効なんてあったのか？ そいつは初耳だな。よし、私も貰うぜ」

「どれ、御相伴に預かるとしようか」

差し向かいで碧杯を掲げあう二人に触発されたか、魔理沙に神奈子までがそろって池に向かう。

「——ちよつとちよつと、元氣なまで全部摘まないでよね？」

次々筆られてゆく蓮の葉に流石に黙っていられた。まだ花の開く音も聞いていないというのに、丸坊主にされてはたまつたものじゃない。

敢えて言つてはいないがあの池は神社の重要な食料源のひとつでもある。せめて蓮根が食べられるまでは自重してもらわないと困る。非常に困る。

「そう言わずに霊夢も呑みなよー?」

「ああもう。……いいわよ、勝手にして」

蒸し暑いのは確かで、心惹かれるものはないでもなかったが、涙を飲んでそう答えた。

「なんだよ、遠慮なんてらしくないぜ?」

「それはあんたが懐痛めてから言いなさい」

早々と輪の中で茎をくわえている魔理沙にも釘を刺しておく。

「……それに、中身はどうあれ成りは若い娘がそろつて蓮の葉に群がるのはあんまりよろしくないような気がするしね」

「おや不勉強だね巫女。天竺のほうじゃ、至上の女性を指して蓮女というそっだよ?」

「吉祥天ねえ……」

あれは、どつちかといういやらしい意味も含んでいた気がするが。

ちなみに一番格下は象に例えられるとかなんとか。だとすると、蓮の茎をくわえて池に群がるコレは果たしてどちらなのだろうか。

そんなことを考えつつ、きやいきやいかしましく酒盛りを始めた魔理沙たちをぼうつと眺める。

「なんだか楽しそうですね」

と、襖を開けて背後から気配がひとつ。

振り向けば、早苗が小さなお盆を抱えて戻ってくる。ところだった。

「台所、ありがとうございました」

「もういいの?」

「ええ」

畳んだ割烹着を脇に、隣に行儀良く腰を下ろす彼女は、庭先の騒ぎをみて小さく苦笑。

「なんだかご迷惑をかけます」

「いつもの事だから気にしてないわよ」

「霊夢さんはいんですか?」

「まだ昼前よ。今から呑んでたら身が持たないわ」

幾分ぬるくなったお茶を啜って答える。何がおかしいのか、早苗はまた笑いを堪えているようだった。

「では、こんなのはいかがですか?」

ことり、と卓袱台上に置かれた緑の深皿に目をやれば、

鼻先をかすめる甘い焼き菓子の香り。火を通したばかりの丸い月餅が、山のように盛られていた。

「お、なんだ今度はこっちもか？ 美味そうじゃないか」

目ざとくこちらを見つけた魔理沙が、蓮の茎だけをくわえたまま、縁側から身を乗り出してくる。

「いやあ今日はいいい日だなあ。なんか知らんが黙って座ってるよ次々食い物がでてくるぜ？」

「少しは感謝して欲しいもんだけど」

「それで腹が膨れるならいくらでもするぜ」

茎をふっと吹き捨てて、魔理沙は伸ばした左右の手に月餅をにひとつずつ確保。

「……太るわよ」

「お構いなくだぜ。蓮実の薬効は滋養強壮に鎮静、健胃だからな」

そういつて魔理沙は月餅にかぶりつき、幸せそうにもごもこと頬張りはじめる。

「花より団子……、月よりなんていうのかしら、こういうの」

「むぐ。見栄張るより頬張れだな」

「食べるか喋るかどっちかにしなさい」

「……むぐむぐむぐむぐ」

「食べるんかい」

「いや、本当に美味いぜこれ？ なあ霊夢」

「あはは、ありがとうございます」

「なんだ、早苗の手作りなのか？」

「ええ。前に作り方教わったことがあって……この前里のお店に行ったら蓮の実なんて頂いちやつたもので、やってみようかと思っただけです。上手くいくかどうかちよつと自信なかつたんですけど」

「……へえ」

あまりにも美味しそうに食べる魔理沙につられ、こちらもひよいと手を伸ばして齧れば、抑えられた甘みに、しつとりと湿る餡。

蓮餡にしてはやや油が強いが、おなかを満たすにはちよつどいい加減だろうか。

見れば、魔理沙はもう二つ目に取り掛かっていた。

「気にいつていただけで嬉しいです。皆さんにいつて思つてたんですけど……」

「あの分じゃしばらく呑んでるな」

「発端がよく言うわね」

「そいつは心外だな。異文化コミュニケーションのきつかけを作つてやつたまでだぜ？」

いつの間にか、車座になつて呑み比べをはじめてい

る神様ふたりと鬼。どうも、あれでなかなか気が合うらしい。

蓮の葉を傘にして飛び跳ねる諏訪子をちらりと見つつ、むぐむぐと口の中に月餅を詰め込み、魔理沙は私の湯飲みからお茶をひとくち。

「……ん。よく考えてみりやそうだな、月見て跳ねるなんてのは兎ばかりじゃないわけか」

「まさか嫦娥じゃないでしょうけどね」

「はい？」

きよとんとして早苗が聞き返す。

「昔は月にも蟄蛙が居たものなのよ。今じゃすっかり兎の天下だけだ」

「重力井戸の底ってな。知ってるのは大海か大宇宙かはさておき、このとおり蛇と蛙の巫女も、月の丸餅をつくるってわけだ」

「ああ……」

「そうですわね、と頷いて、早苗も月餅を手に取り、しみじみと眺めてから口に運ぶ。」

太陽には三本脚のヤタガラスがいるように、その対になる太陰である月には、蟾蜍ヒキガエルがいるとされる。夫を裏切って、不老不死の薬を独り占めして神になろうとした女が、その罪によってヒキガエルに変えられた

のだとか。

「今になって思えば、地底騒ぎの黒幕がどいつかなんて、えらくわかりやすかったんだな」

「そうね、月に行つたときにでもついでに聞いてくれば良かったのかしらね」

「あ、あははは……」

冷や汗を浮かべつつ、早苗は泳いだままの目で月餅を盛つた皿をこちらに押しやり、

「ええと、まだこれ、沢山ありますからどうぞ？」

「おお、悪いな」

全然悪気は感じていない様子で三つ目を食べ始める魔理沙。よく入るものだ。

「むぐ。しかし聞いてると里のほうでも人気なんだな早苗んとこは。どこその困窮巫女とはえらい違いだぜ。なあ霊夢？」

「何が言いたいのかしら」

「お前なんか里に行つても店が片っ端から雨戸閉めて回るんだろ？」

「不名誉なこと言わないでくれる？」

「というかそれは魔理沙の方に言つてやりたい。」

「いやなに、蛇と蛙だけじゃ足りないからな。いっそお前んとこで余つた神様でも祀つてみたらどうかと

思つてな？ 少なくとも今よりは賑わうぜ、きつと。

……なにしろこれ以上寂れようがないからな」

「あのねえ……」

溜息と共に、残る月餅を口の中に押し込む。

「これ以上乗っ取られちゃたまらないわよ」

「今でもだいたい似たようなもんじゃないか」

「あ、あはは……」

乾いた笑いがますます深くなる早苗。

なお一説によれば三すくみの三匹目は蛞蝓ではなく百足だとも言うらしいが、いずれにせよ、あまりイメージはよろしくないのは間違いない。

「さて、と」

「ん、なんだどこ行くんだ霊夢？」

ちやぶ台に突つ伏して月餅を齧る魔理沙に、縁側の蓮の葉を指差した。

「いい加減杯代わりだけじゃ勿体無いから、荷葉飯かようはんでも作るわ。このままだと花まで全部食べつくされそう
な気もするし」

「あ、お手伝いします」

「いいわ。これ以上世話になつてばかりじゃ面目立たないもの」

立ち上がりかけた早苗を制し、魔理沙の手を掴む。

「ほら、あんたも手伝うのよ」

「……なんだよ、もう食えないぜー？」

どうももう酔っ払っているらしい。

「いいから来なさいつての」

「あ……」

たわ言を無視して、魔理沙の襟首を引きずりながら台所へ向かう。

その途中で、魔理沙はぼつりと呟いた。

「なんだな、どっちかって言うところありや蝸牛かたむしだな」

「それこそ三匹目は蛇足よ」

「違うないぜ」

つまりは。

……山の頂のかの神社の上では、千年来の二柱の争いなど所詮は角上のも。些細なじやれ合いでしかないのかもしれない。

久方の 雨も降らぬか 蓮葉に
たまれる水の 玉に似たる見む

(新田部皇子)

【第2版あとがき】

はじめまして。そしてお久しぶりです。

お手にとつて頂きましてありがとうございます。銅
おりはと申します。

梅雨と初夏と信仰とは何かをテーマにお送りする
当サークル2冊目のSS本の再販となります。

第一回東方崇敬祭で頒布した作品ですが、守矢神社
中心の今回のイベントにあたっては外せないだろう
と思い、非想天則を踏まえつつの改訂、再販となりま
した。

ますますとんでもない方向に迷走しているような
気もしないでもありませんが、書いていて楽しかった
ので良ししたいと思います。

……蛇足ながらあえて付け加えさせていただけれ
ば、作中で触れた信仰の定義、「多くの人の想いのあ
りようで、原形を離れてカタチが変わる」ということ
はそのまま昨今の二次創作の世界にも当てはまるの
ではないか、と考えた次第であります。

相も変わらず拙いものではありませんが、どうか少し
でも楽しんでいただければ幸いです。

今回の発行に当たっても、監修として白身氏、デザ
インと装丁にはRiz a氏にお手伝いいただきまし
た。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

— それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

「三すくみには蛞蝓が足りない 第2版」

発行 平成21年10月25日 御射宮司祭

オルハザカサンパンチ
折葉坂三番地

あかがね
銅 おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>

<http://members.jcom.home.ne.jp/oruhaindex.htm>



東方 project fan book

発行：折葉坂三番地

2009.10.25